

一

次の各文の――部について、1～5のカタカナは漢字に直し、6～10は読み方をひらがなで書きなさい。

- 1 ギジュツをみがく。
- 2 人工エイセイの打ち上げに成功する。
- 3 ブナンな選択をする。
- 4 正月にはカドマツをかざる。
- 5 発熱のためほおに赤みをオびる。
- 6 市街地の区画整理を行う。
- 7 交差点を右折する。
- 8 河川の様子を観察する。
- 9 ややこしい説明を省く。
- 10 強敵を退ける。

三

次の1～10の文について、日本語として正しければ○を、誤っていれば×と答えなさい。

- 1 それは全然大丈夫だよ。
- 2 あなたのおっしゃるとおりです。
- 3 個人の自覚次第で結果は異なる。
- 4 大きな声で本を読ませる。
- 5 そんなことはとんでもございません。
- 6 かべにかかった絵をながめる。
- 7 なかなか朝早くには起きられない。
- 8 十日に予定していた試合を二十日に延期になりました。
- 9 昨日先生が私に本をいただいた。
- 10 言語の理解は、生き方や文化の理解でもある。

二

□内の漢字と 否・非・不・未・無 のいずれかを組み合わせる解答らん符合うように熟語を作りなさい。

- |                        |
|------------------------|
| 礼・来・応・安・害<br>熟・認・言・業・足 |
|------------------------|

#### 四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

機械工学的な理由はともかく、なぜ人間はヒューマノイドにこんなにも惹かれ、こだわるのだろうか。そこには、理性では理解し得ない不思議な感情が介在しているような気がする。それは、おそらく「自己愛」とも呼ぶべき気持ちなのかもしれない。

ギリシア彫刻や鎌倉時代の仏像のように、理想の美を追い求めていけば、その自己愛は芸術にまでいたる。自分を嫌いな人間などいない。自己嫌悪や自己否定は自己愛の裏返しだ。限りなく人間に近い存在を作る。つまり、人間のコピーを人工的に作りたいという欲望があるとしたら、ヒューマノイドは人間の自己愛を実現するためのものだろう。

我々人間の身体は、地球上のほかの生物同様、とてもユニークだ。三十数億年という生命進化の過程で到達した独特の形をしている。もちろん、チーターほど速く走れないし、ワシのように空を飛ぶこともできない。だが、直立二足歩行とその結果、自由になった両手、発声と発話などの機能は、知能や知性の発達をうながし、それは文化や文明を生み出した。

ればならない。この場合の違いとはなにか。それは形態ではなく、人間だけが固有にもっている「意識」や「心」ではないだろうか。では、ロボットが「意識」や「心」を持ったときにはどうなるのだろうか。

鉄腕アトムはロボットではないという意見がある。アトムのように意志を持ち、泣いたり笑ったり自由に動き回ることのできる存在を、果たしてロボットと呼んでいいのかという考え方だ。もしもそうした機械ができたなら、それは人工人間のようなものだ。

これは、クローン人間のような人工生命を作るときの論議と似ている。機械と生命体とは違うという意見もあるだろうが、機械に「意識」や「心」が宿ることは絶対にないと断言できない以上、人工人間という意味で両者は同じだ。

現在のバイオテクノロジーを使えば、生物学的な人間を作ることとは可能かもしれない。遺伝学者や生化学者の中には、世界中から非難されるのを覚悟でクローン人間を作ろうとしている研究者がいる。彼らの主な動機は、移植医療への貢献や子どもに恵まれない人々に福音をもたらすという医学的な目的を達成することだ。

そして人間は、その形への特別な感情を反映させたかのように、昔から自らと同じ形をした文字通りの人形をたくさん作ってきた。

身代わりの雛人形に厄災を引き受けてもらったり、相手に呪いをかけるために藁人形を作った。ギリシア神話のピグマリオンは象牙で作った美女に恋をし、鍛冶屋と火の神ヘファイトスは黄金の小間使いを作って身辺の雑事をさせた。

そこには、超能力を持つ分身を自由に操りたいという願望や、自らの神秘的な力に対する恐れがある。人間が最も恐れるのは実は同じ人間だ。同時に人間が最も理解しにくいのも自分自身、人間なのである。

だが、それは同時に自己嫌悪が憎悪に転じる可能性を含んでいる。なぜなら、自分と全く同じ人間がいたらアイデンティティの危機を感じるだろう。自己の存在が脅かされれば、おそらく脅威の対象を憎悪するはずだからだ。

そのときに重要なのが差異である。人間は他者と少しだけ違うことで安心感を得る。似ているが少しだけ違う存在。それがヒューマノイドというわけだ。

少しだけ違うことがヒューマノイドにとって大切だとすれば、似ている存在を作った場合、そこには明確な差異がなければ、

もちろん、クローン人間を作るとは、倫理面から法的に厳しく禁止されている。その理由は、宗教的なものから道徳的なもの、生命倫理に基づいたものなどさまざまだ。

B、最も根元的な問題はクローン人間に人格を認めるかどうか、我々には判断できないという点にある。これが生殖細胞ではなく体細胞によって作られたクローン人間の場合、ますますやっかいな存在になるだろう。

あくまで人工的に作られた存在を、我々は同じ人間として扱うべきか。それとも、移植医療のための単なる臓器提供体とみるべきか。この問いに対する答えは、まだハッキリとは出ていない。機械に「意識」や「心」が宿ることはないと言えないのと同様に、クローン人間が必ず「意識」や「心」を持つとも言い切れない。

議論を進めていけば、やがて「意識」や「心」の問題にいきつくのだ。もしクローン人間の人格を認めるという立場をとるのなら、「意識」や「心」を持つようになったロボットの「ロボット格」をも認めざるを得ない。

姿形や内面さえも人間そっくりの機械に対して、我々は一体どういう態度をとるべきか。クローン人間に関する議論は、決してエンジニアリング（機械工学）の分野にも無縁ではない。

《注》ヒューマノイド：人間の形をしたロボットののこと。

アイデンティティ：自分とはこのような人間であるという

明確な存在意識。

福音：喜ばしい知らせ。

問一 —— 部①とはどのようなものを説明している部分を本文中から十六字でぬき出しなさい。

問二 —— 部②を具体的に表している部分を本文中からぬき出しなさい。

問三 —— 部③の理由として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 ヒューマノイドにとって変わられてしまうから
- 2 自分の神秘的な力はコントロールできないから
- 3 同じ人間がいるとアイデンティティの危機を感じるから
- 4 人間は最も理解しにくい生物であるから

問四 —— 部④とありますが、何が違っていればいいと筆者は考えていますか。わかりやすく説明しなさい。

問五 —— 部⑤が指している部分を二十九字でぬき出し、初めの五字を答えなさい。

問六 —— 部⑥とありますが、それは何と何ですか。本文中の言葉で答えなさい。

問七 —— 部⑦とありますが、なぜ答えが出ていないのですか。わかりやすく説明しなさい。

問八 A・B に入る語として適当なものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 しかし
- 2 そして
- 3 あるいは
- 4 つまり
- 5 もちろん

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

しばらくすると、治郎さんも松井さんも腕組みをして眠ってしまった。

「ねちゃったわね。どこでもすぐねちゃうのが二人の特技みたいなものよ。」

由里さんがほへんだ。表情がやさしくて、どことなく聡明さが内に秘められている。

「由里さんは、なぜ荒川の水源に行ってみたいんですか？」

高志は、気になっていたことを聞いてみた。

「よくわからないわ、わたしにも。でも……」

由里さんは、考えこむように首をかしげた。

「たぶん、すこしでもわたしの世界を広げたいのよ。そうすれば、それだけ豊かになれるから。そのために、わたしは水にこだわっているんだわ。」

「水にこだわるって？」

高志には、由里さんの言うことがよくわからない。

「わたしは目が見えないでしょ。だから、音に集中する以外ないのよ。もちろん音のほかにも、自分でもわからない感覚

……由里さんは、精一杯生きているんだな。自分を取り囲む世界と精一杯格闘しているんだな。

孝一にもそんなところがある。ワル連中の誘いをきっぱりと断った孝一。逆車輪をこなした孝一。英語の渡辺先生との距離を定めた孝一。由里さんと同じように、どこかに真剣なものがある。

……孝一も来られればよかったのにな。

高志は、向かい側の車窓に目を向けた。いつのまにか、電車はなだらかに続く山の底を走っていた。

三峰神社から本格的な登山道に入る。

「問題は、ここから地蔵峠、お経平を通じて白岩小屋までの登りだ。三時間のコースだけれども、由里ちゃんのペースがわからないので六時間みている。」

山道に入っただけで、由里さんの手を引いている治郎さんが振り向いて言った。

「がんばるわ。」

真上の空しか見えない針葉樹林の底に立ち止まると、ひんやりした冷気が肌を刺す。

高志は、口でのアドバイスをかかってた。

のようなものはあるのよ。どこかへ出かけるにしても、ここからここまで何歩というふうに数えているわけではないのね。杖の音、周囲の音、それに風なんかも関係しているのかもしれないけれど、そういうもので自分の位置が判断できるのよ。何かわたしの前に立ちはだかると、触れてもいないのに、なんとなくわかるのね。何か……、こう……、空気圧の違いとでもいうのかしらね……。そういったもので、見えな

由里さんは、目を半眼に開いたまま、どこか遠いところにあるものを探りてつかもつとしているかのように話し続けた。「けれども雨の日はとっても疲れるの。雨がかさにあたる音で、まわりの音が消されてしまうのね。たとえば、車が水をはねる音と雨がかさを打つ音がいっしょになっちゃって。そうすると、車がどこを走っているのかわからなくなってしまうのよ。荒川の水源地帯とわたしの上に降る雨は直接関係はないのだけれど、水源を知ること、雨をより深くわかるような気がするの。」

高志は、由里さんの水源行きの理由を、治郎さんから一度聞いていた。が、それをじつさいに由里さんの口から話されると、どこからともなく熱いものが込み上げてくる。

「右が谷だよ。」

「前に大きな石があるよ。」

「次は下りだよ。」

由里さんは、しっかりと足場を踏みしめて歩いている。

一時間も歩くと、由里さんはもう樹林や登山道の様子をつかんでいた。小鳥の鳴き声に耳を傾ける余裕まで身につけている。

白岩小屋に着いたのは四時だった。雲取山登山のなかでもっとも苦しいとされる前白岩山の登りを、由里さんは難なく克服していた。

由里さんの顔から汗が吹き出していた。

翌日は五時に起きた。白岩小屋に荷物を置き、サブザックだけを背負って小屋を出た。白岩山、大ダワ、雲取山荘と歩き、展望のきく雲取山頂に着いたのは九時だった。

「由里さん、着いたよ。」

高志は、初めての登山に興奮していた。雲海を見るのも初めてだ。

……由里さんはどんな気持ちで山頂に立っているのだろう。由里さんは見えない目で、いく度もいく度も山頂の周囲を見渡している。全身を耳にして、感じ取れるすべてのものを、

じつと心の目で見ようとしているかのようだ。

「めしを作るからな。待ってる。」

治郎さんと松井さんは、二人を山頂に残して遅い朝食の準備にとりかかった。

「山は、平地とは違うのね。」

由里さんは、白い杖を使って山頂を歩き始めた。

「危ないよ。」

「崖でもあるの?」

「崖はないけど……」

「だいじょうぶよ。こうして十七年も歩いてるんだから。」

高志は、由里さんにひとりの時間を持たせてやろうと思つた。会ってからまだ二日しかたっていないけれど、由里さんの感覚の確かさは信頼できる。

……由里さんはきつと、山頂をかみしめようとしているに違いない。

由里さんの歩いていく方向に危ないものがないのを確かめると、高志は由里さんから目をはなした。由里さんは高志に背を向けるかっこうで十メートルほど進んで、風に向かって立った。そのままじつと空を見上げている。そこには、雲ひとつない透き通った青空が広がっている。

全盲の由里さんに天空の明るい輝きが見えるはずがない。

でも高志には、由里さんがはつきりと雲取山頂の青く澄んだ空を見ているような気がしてならなかった。

突然、ガクリと由里さんがひざを折った。

高志は、あわててかけつけた。由里さんが石につまずいて倒れたのかと思つたのだ。

由里さんは、ふこうともしないで、ポロポロと大粒の涙を流していた。

「どうしたの?」

高志は、由里さんの前に立った。

「なんでもないわ。なにかもがうれいだけ。」

由里さんは、からだを震わせている。

高志は、歯をかみしめた。つばをのんだ。両手をかたぐにざりしめて空を見つめた。のどの奥に大きなボールが引つ掛かっているようだった。青空の輝きがほおつとかすんで見えた。

なぜあふれてくるのかわからない涙を、高志は手の甲でふいた。

(篠田勝夫『高志と孝一』)

《注》聡明：頭がよく、物事の理解が早いこと。かしこいこと。

逆車輪：体操の鉄棒の技の一つ。

問一 — 部①とありますが、由里のこの言葉の意味を

くわしく説明した次の文の  にあてはまる言葉を入れなさい。ただし、 a・ b については本文中からマスの数と同じ字数でぬき出して入れ、 A については後のア〜エから選び、記号で答えなさい。

由里は目が見えないために、音をたよりにして周囲の状況を知ることができる。しかし雨が降ると  a  b  c  d  e  f  g  h  i  j  k  l  m  n  o  p  q  r  s  t  u  v  w  x  y  z  A  B  C  D  E  F  G  H  I  J  K  L  M  N  O  P  Q  R  S  T  U  V  W  X  Y  Z  AA  AB  AC  AD  AE  AF  AG  AH  AI  AJ  AK  AL  AM  AN  AO  AP  AQ  AR  AS  AT  AU  AV  AW  AX  AY  AZ  BA  BB  BC  BD  BE  BF  BG  BH  BI  BJ  BK  BL  BM  BN  BO  BP  BQ  BR  BS  BT  BU  BV  BW  BX  BY  BZ  CA  CB  CC  CD  CE  CF  CG  CH  CI  CJ  CK  CL  CM  CN  CO  CP  CQ  CR  CS  CT  CU  CV  CW  CX  CY  CZ  DA  DB  DC  DD  DE  DF  DG  DH  DI  DJ  DK  DL  DM  DN  DO  DP  DQ  DR  DS  DT  DU  DV  DW  DX  DY  DZ  EA  EB  EC  ED  EE  EF  EG  EH  EI  EJ  EK  EL  EM  EN  EO  EP  EQ  ER  ES  ET  EU  EV  EW  EX  EY  EZ  FA  FB  FC  FD  FE  FF  FG  FH  FI  FJ  FK  FL  FM  FN  FO  FP  FQ  FR  FS  FT  FU  FV  FW  FX  FY  FZ  GA  GB  GC  GD  GE  GF  GG  GH  GI  GJ  GK  GL  GM  GN  GO  GP  GQ  GR  GS  GT  GU  GV  GW  GX  GY  GZ  HA  HB  HC  HD  HE  HF  HG  HH  HI  HJ  HK  HL  HM  HN  HO  HP  HQ  HR  HS  HT  HU  HV  HW  HX  HY  HZ  IA  IB  IC  ID  IE  IF  IG  IH  II  IJ  IK  IL  IM  IN  IO  IP  IQ  IR  IS  IT  IU  IV  IW  IX  IY  IZ  JA  JB  JC  JD  JE  JF  JG  JH  JI  JJ  JK  JL  JM  JN  JO  JP  JQ  JR  JS  JT  JU  JV  JW  JX  JY  JZ  KA  KB  KC  KD  KE  KF  KG  KH  KI  KJ  KK  KL  KM  KN  KO  KP  KQ  KR  KS  KT  KU  KV  KW  KX  KY  KZ  LA  LB  LC  LD  LE  LF  LG  LH  LI  LJ  LK  LL  LM  LN  LO  LP  LQ  LR  LS  LT  LU  LV  LW  LX  LY  LZ  MA  MB  MC  MD  ME  MF  MG  MH  MI  MJ  MK  ML  MN  MO  MP  MQ  MR  MS  MT  MU  MV  MW  MX  MY  MZ  NA  NB  NC  ND  NE  NF  NG  NH  NI  NJ  NK  NL  NM  NO  NP  NQ  NR  NS  NT  NU  NV  NW  NX  NY  NZ  OA  OB  OC  OD  OE  OF  OG  OH  OI  OJ  OK  OL  OM  ON  OO  OP  OQ  OR  OS  OT  OU  OV  OW  OX  OY  OZ  PA  PB  PC  PD  PE  PF  PG  PH  PI  PJ  PK  PL  PM  PN  PO  PP  PQ  PR  PS  PT  PU  PV  PW  PX  PY  PZ  QA  QB  QC  QD  QE  QF  QG  QH  QI  QJ  QK  QL  QM  QN  QO  QP  QQ  QR  QS  QT  QU  QV  QW  QX  QY  QZ  RA  RB  RC  RD  RE  RF  RG  RH  RI  RJ  RK  RL  RM  RN  RO  RP  RQ  RR  RS  RT  RU  RV  RW  RX  RY  RZ  SA  SB  SC  SD  SE  SF  SG  SH  SI  SJ  SK  SL  SM  SN  SO  SP  SQ  SR  SS  ST  SU  SV  SW  SX  SY  SZ  TA  TB  TC  TD  TE  TF  TG  TH  TI  TJ  TK  TL  TM  TN  TO  TP  TQ  TR  TS  TU  TV  TW  TX  TY  TZ  UA  UB  UC  UD  UE  UF  UG  UH  UI  UJ  UK  UL  UM  UN  UO  UP  UQ  UR  US  UT  UY  UZ  VA  VB  VC  VD  VE  VF  VG  VH  VI  VJ  VK  VL  VM  VN  VO  VP  VQ  VR  VS  VT  VY  VZ  WA  WB  WC  WD  WE  WF  WG  WH  WI  WJ  WK  WL  WM  WN  WO  WP  WQ  WR  WS  WT  WY  WZ  XA  XB  XC  XD  XE  XF  XG  XH  XI  XJ  XK  XL  XM  XN  XO  XP  XQ  XR  XS  XT  XU  XV  XW  XX  XY  XZ  YA  YB  YC  YD  YE  YF  YG  YH  YI  YJ  YK  YL  YM  YN  YO  YP  YQ  YR  YS  YT  YU  YV  YW  YX  YZ  ZA  ZB  ZC  ZD  ZE  ZF  ZG  ZH  ZI  ZJ  ZK  ZL  ZM  ZN  ZO  ZP  ZQ  ZR  ZS  ZT  ZU  ZV  ZW  ZX  ZY  ZZ

問二 — 部②とありますが、高志はなぜそう思ったのですか。「生き方」という言葉を使って説明しなさい。

問三 — 部③とありますが、高志はなぜそうしたのですか。「共感」という言葉を使って説明しなさい。

問四 本文中の  について、この場合、あてはまる言葉として最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- ア 光も音も
- イ 空気も風も
- ウ 温度も湿度も
- エ 地面も霧囲気も

問五 — 部④とありますが、高志がこのように思った理由を説明しなさい。

問六 — 部⑤とありますが、このことがよくわかる二つの文を本文中からぬき出してそのまま書きなさい。

問七 — 部⑥とありますが、なぜ高志は涙を流したのですか、その理由を「真剣」という言葉を使って説明しなさい。



六

次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

- A 紫陽花あじさいに秋冷あきひやいたる信濃しんのうかな  
杉田久女すぎたひさよ
- B 野のを焼やいて帰かえれば燈下とうか母ははやさし  
高浜虚子たかひなきよこ
- C ぜんまいののの  ばかりばかりの寂光じやくこう土つち  
川端茅舎かわはたけちや
- D とどまればあたりあたりにふゆる蜻蛉とんぼかな  
中村汀女なかつむらていよ
- E つきぬけて天上てんじやうの紺曼珠沙華こんまんじゆしゃげ  
山口誓子やまぐちせいし

問一 Cの俳句の季語と季節を答えなさい。

問二 切れ字の用いられている俳句をすべて選び、記号で答えなさい。

問三 Eの俳句に用いられている表現技法として適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 対句                      2 擬人法
- 3 比喩                      4 体言止め

問四 に入る漢字一字を考えて答えなさい。

問五 次の説明はどの俳句のものですか。それぞれ記号で答えなさい。

- 1 ふだんの見逃みのがししてしまいそういっしゆんな一瞬いっしゆんを切り取った俳句
- 2 何気ない風景の中で色の対比たいひがしつかりとなさされている俳句
- 3 母のやさしさがふとしたことからも感じられる俳句
- 4 季節の変化の早さを感じさせてくれる俳句

このページは余白です。

解答

一

- 1 技術 2 衛星 3 無難 4 門松 5 帯〔ひる〕  
6 くかく 7 うせつ 8 かせん 9 はぶ〔く〕 10 しりぞ〔ける〕

二

無(礼)(※非礼も可)・未(来)・否(忘)・不(安)・無(害)  
未(熟)・否(認)・無(言)・非(業)・不(足)

三

- 6 1 ○ ×  
7 2 ○ ○  
8 3 × ○  
9 4 × ×  
10 5 ○ ×

四

- 問一 理性では理解し得ない不思議な感情  
問二 直立二足歩行  
問三 3  
問四 人間だけが固有にもっていると信じている「意識」や「心」といった明確な差異  
問五 意志を持ち  
問六 機械と生命体  
問七 クロイン人間が「意識」や「心」を持つとも持たないとも言い切れず、判断ができないから。  
問八 A 4  
B 1

五

- 問一 a まわりの音が消されてしまう  
b 豊かになれる  
A ウ  
問二 精一杯生き、自分を取り囲む世界と格闘している孝一は、真剣な生き方をしている由里と似ており、同じ合  
うものがあるだろうと思ったから。  
問三 真剣に生きている由里に共感し、近くで手助けをしたいと思ったから。  
問四 イ  
問五 由里は全盲だが、確かな感覚を持っているからだいじょうぶそうなので、自由に一人で山頂の雰囲気を楽しむ  
わせたあげたいと思ったから。  
問六 ● 一時間も歩くと、由里さんはもう樹林や登山道の様子をつかんでいた。  
● 雲取山登山のなかでもっとも苦しいとされる前白岩山の登りを、由里さんは難なく克服していた。  
問七 全盲の由里が全身で登頂した達成感と喜びを感じていることに感動したから。

六

- 問一 季語：ぜんまい 季節：春  
問二 A, D  
問三 4  
問四 字  
問五 1 D 2 E 3 B 4 A

四

問七

「機械に『意識』や『心』が宿ることはない」と断言できないのと同様に、クローン人間が必ず『意識』や『心』を持つとも言いきれない」と述べられています。

五

問七

「全身を耳にして、感じ取れるすべてのものを、じっと心の目で見ようとしているかのよう」に山頂をかみしめ、涙を流し「なにもかもがうれしいだけ」とからたを震わせている由里の姿に、高志は共感し、感動しているのだと考えることができます。